

# 丸山敏雄と川面凡児

—「全一統体」思想と靈魂觀をめぐって—

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

千年のうたがひの雲おし撥<sup>ひら</sup>き祖神垂示の跡をあらはす（川面先生）  
科学の塔にこもりて空見えぬもの知り人よきけ来り見よ（『川面全集』）

## はじめに

神道とは、日本列島に居住する日本民族の間で発生し、日本人の生活全般の基底となった固有の信仰であり、それに基づく精神的な営み（文化）を指している。その起源ははっきりしないが、世界で最古にして最長の「縄文文明」がルーツであるのは間違いない。

『古事記』『日本書紀』以降の歴史の中で、神道はさまざまに展開して現在に至る。とりわけ 6 世紀中頃に伝来した仏教との対立や習合を基軸として、中世から江戸期において吉田神道をはじめ各種教派の動きが活発化した。とりわけ江戸時代の中期から後期にかけて興った復古神道が大きな力を得て、明治維新や神仏分離につながる。ほどなく神道を国教とする国家神道体制が成立した。

戦後の日本では、国家神道に対する嫌悪感や、GHQ による〈神道指令〉の影響から、天皇（天皇制）と結びついた神道に対する強いアレルギー反応がつづいた。他方、自然環境の汚染・破壊に対する危機意識が高まると、アニミズムを基調とした神道が見直されるようになる。仏教渡来以前の神道が原初（原始）神道とか古神道と呼ばれ、海外の研究者からも注目されている。昨今では世界文明の転換期の認識が広がると共に、自国文化への回帰現象が生じて、とくに伊勢の神宮と出雲大社のご遷宮が重なった 2013 年には空前の参拝者が両聖地へと足を運んだ。

そうした神道の歩みを振り返るとき、近代国家の建設で激変していく明治期は、神道界においても激動期だったことがわかる。一方では国家神道が根を下ろしながら、他方ではその枠内には収まらない幾多の民衆神道が興亡し、大正から昭和初期には国家権力による弾圧事件までも起こる。

本稿で採り上げる丸山敏雄は、かかる宗教弾圧の被害者の 1 人となった。詳しいことは一切省くが、神道系の宗教教団「ひとのみち」の幹部（准祖）の 1 人として、昭和 12 年に「不敬罪」のかどで検挙され、拷問を受け、一年余り後に仮釈放されてからは、無実を晴らすための長い裁判に臨んだ。法廷での陳述のための研究に明け暮れる中で、敏雄はそれまでまったく熟知していなかった神道家の川面凡児の著作と出会う。

偉なる哉翁<sup>かな</sup>の信念、大なる哉翁の明智、宏なるかな翁の業績、遠なるかな翁の徳、之大神<sup>これ</sup>のみひかりのいたりの一<sup>ひと</sup>のわざなり。かしこしや、たふとしや。（ルビは引用者）

これは昭和 17（1942）年 5 月 21 日に、『川面凡児全集』（以下『川面全集』と略記）第 8 巻を読了して奥扉に書かれた読後感の一節である。丸山敏雄は川面凡児の著作の、何にそれほどまで感激したのであろうか。そしてどのような影響を受けたのであろうか。

筆者は若い頃に、丸山敏雄が熱心にその「全集」を読みふけたという川面凡児という人物の存在を知り、丸山敏雄記念文庫に収蔵されている同「全集」の分厚い第1巻を繙いて驚嘆した。〈なんとおびただしい靈魂の体系が書き連ねられていることか……〉。読み込むにはとても歯が立たぬと思い、それから長い間、再び繙くことはなかった。ただしその頃に興味深く読めたのは、一流の新聞記者だったという弟子の金谷眞による『川面凡児先生伝』（初版は1929年、みそぎ雑誌社刊、以下『川面伝』と略記）である。

この本の巻頭には、川面の遺影が掲げられている。生涯を通して幾度となく行った<sup>みそぎ</sup>禊の行の時のものであろう。白地に何やら書き込みのある太い鉢巻きを締め、白衣に身を包み、眼光炯々とした白髯の行者姿がそこにある。実際の川面は小柄だったというが、見る者に畏怖の念を抱かせるその肖像写真は脳裏に焼き付いた。

やはり筆者が若い頃のある日、東京都立の霊園としては最大の多磨霊園にある丸山敏雄の墓所を、父親（丸山竹秋）と一緒に参拝したときのことだ。いつものように自宅から自転車で行き、参拝の後に霊園の中央を貫くバス通りの中ほどあたりで父は自転車を停めた。そして見知らぬ墓所に入って拝み始める。見ると、四畳半ほどの墓域の入口には石の鳥居が建てられ、土饅頭の形の墳墓が草むしている。そこが川面凡児の奥津城であった。

〈いつかは川面先生の「全集」をきちんと読もう……〉と思ったものの、あれからどれほどの歳月が過ぎてしまったことか。もともと神道には親しみがあり、いろいろな図書資料に目を通してきたが、筆者が神道の靈性について研究したいと強く思うようになったのは、2013年秋の伊勢神宮のご遷宮に参列したことが契機となっている。丸山敏雄の研究を深めるには、どうしても古神道の大家とされる川面凡児について触れないわけにはいかない、という思いも強くなってきた。

いまだに筆者は『川面全集』の全巻を精読するに至っていないが、その独特な神道思想の大略は把握できたことから、本稿では丸山敏雄の「川面評」に重点を置きながら、敏雄の思想や実践に川面の何が影響を与えたのかを探ってみたい。